

その日の夕方になって、イエスは、「向こう岸に渡ろう」と弟子たちに言われた。そこで、弟子たちは群衆を後に残し、イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出した。ほかの舟も一緒であった。激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、水浸しになるほどであった。しかし、イエスは艫の方で枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして、「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言った。イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、「黙れ。静まれ」と言われた。すると、風はやみ、すっかり凪になった。イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」弟子たちは非常に恐れて、「いったい、この方はどなたなのだろう。風や湖さえも従うではないか」と互いに言った。 -マルコ4章-

「神とともにいる」救いの時



ガリラヤ湖を渡って向こう岸へ向かう小船は、私たち教会の姿です。イエスが向かうガダラ地方とは、神を知らない異邦の地、「神と出会う喜びを秘めている地」です。

一方、世界に向けて、喜びの運び手である小船（教会）の航行には、どんな想定外な難事が待ち受けているや知りませんが、神だけは知っておられるのです。

海（この世）は、未知なる悪の領域と恐れられた世界。小舟（教会）がそこを渡る人々を守ってくれる唯一の領域であるのは、漕ぎ手は弟子たちですが、船頭はイエスだか

らです。

嵐になって小舟が波に翻弄されたとき、頼みの綱の船頭が艫の方で眠っておられるのを見て、漕ぎ手たちはパニックでしたが、教会を導くイエスは、眠っておられる方ではありません。伏せておられるイエスの目は、私たちの心（信仰）を見つめておられることを、私たちは時として忘れがちになります。

イエスが私とともにおられるなら、船がたとえ波に沈められようと、恐れに囚われることはないでしょう！イエスとともにいるなら、信仰者は殉教も厭わない聖霊の力を得るからです。人類にとって、哀れで最も不幸なのは希望のない「神不在の災禍」なのです。

いつ終息の日が訪れるともしれないコロナウイルス禍で世界は今、嵐の中を漕ぎあえいでいます。艫の方で眠って（？）おられるイエスに、今私たちの何処を見られているのでしょうか？

今、私たちに大切なことは、日常生活が破壊されようとも希望を失わないで生活の中に、私たちを見つめておられるイエスの存在を見失わないことでしょう。人の力の及ばない災禍の中で、信仰者が取るべき生き方は、不幸、不足を恨むのではなく「真の救い」を神の計らいに委ねる「信頼の心」です。神とともにいる限り、恐れるものはないのです。



二千年前の出土船